

《海外展望》

## 中国から読み解く世界の近未来

(2011年10月24日)

10月18日、中国の第17期中央委員会第6回総会、いわゆる6中全会が終了した。2003年に誕生した胡錦濤政権の総括という意味も籠めて、「文化輸出およびサービス輸出がこの10年間で急成長した」と中国の輸出力拡大と順調な経済体制を誇らしげに謳いあげたが、中国の未来は安泰どころか暗

雲垂れこめ不安いっぱいといったところだ。中国の政治経済は、もはや一国の問題ではなく、世界全体に強い影響を及ぼす。巨大国家中国は今後、どのような体制の下、誰がリードしていくことになるのだろうか。残り1年余となった胡錦濤政権が抱える不安と後継体制を俯瞰してみよう。

### 江沢民死亡の怪情報

今年(2011年)7月1日、中国共産党は党創設90周年の節目を迎えた。この日に北京―上海間の高速鉄道が正式運行開始となり、胡錦濤主席(68)が全国民に向けた講話を披露するなど、華々しい祝賀行事が相次いだ。そうしたなか党創設90周年の祝賀行事に江沢民前主席(85)が出席するか否かに注目が集まっていた。江沢民は今なお中国政界に隠然たる力を発揮し、次期国家主席の習近平(58)の後ろ盾でもある。その江沢民が登場し、何か重大な話をするのではないかと期待されていたのだ。

ところが7月1日当日、江沢民は姿を見せなかった。

7月6日、香港の亜洲電視(テレビ局)が「江沢民が救急搬送。脳死状態」という速報を流すや、中国のみならず世界中が大騒ぎとなった。習近平の後ろ盾が死亡すれば、次期国家主席の立場が脆いものになりかねない。

しかし江沢民に関する続報は一切なく、中国政府もこれにまったく触れない。もともと中国では、江沢民の動向に関しては全てを習近平が発表することが党の機関で決定されている。習近平またはその周辺以外から江沢民情報が出ることは有り得ない。

つまり香港のTV速報はガセネタだった可能性が高い。



だが香港の大手テレビ局として世界に名を馳す亜洲電視が、江沢民のような大物の死亡情報を推測で流すはずはない。政府中央の相当な地位にある人物からのリークが

### 江沢民が胡錦濤と固い握手

そんな状況下、日本から9月末に第11回中国中央党学校訪問団の66人が中国を訪れた。日中間は政治経済的には強い結びつきを見せているが、両国の国民感情は悪化しており、両国政府は友好に向けての熱心な取り組みを模索。今回の訪中団もその延長上のもので、今月（10月）末には中国の党学校研修生が100人規模で来日することも決まっている。

中央党学校訪問団の一行は北京で李源潮組織部長（60）の講話を聞く機会を得た。

李源潮は胡錦濤派（共青团）中央政治局委員で、次期政治局常務委員になる可能性が高いとされる人物。党組織部長の要職に就く実力者。彼の話から中国政界の動向をある程度推測できるのではないかと考えていた外務省幹部たちは、落胆させられた。李源潮が政治に関わる話を一切しなかったからだ。

政治談議を一切しなかったことは、逆に、現在の中国政府内部が緊張の中にあることを窺わせた。

中央党学校訪問団が帰国して10日ほど経った10月9日——。10月10日に「辛亥革命100周年」を迎える中国では、前日の9日にもさまざまな記念行事が行われていたが、北京の人民大会堂で胡錦濤国家主席

### 激烈な権力闘争

あったのではないか。その背後には中国政府の奥底で危険な綱引きが行われているのではないのか。そうした憶測があちこちで囁かれていた。

が演説を行うときに、江沢民が姿を現したのだ。

演説を終えた胡錦濤は壇上に上がった江沢民と笑顔で握手を交わし、その様子はテレビを通して全世界に放送された。今年85歳になる江沢民は係員に手を引かれ、年相応の老人らしい足取りだったが、重病説など吹き飛ばす雰囲気も見せていた。

じつ是北京の情報通たちは、「7月に江沢民死亡説を流したのは胡錦濤ではないのか」といった噂話を流していた。中国政界では今、水面下で史上稀にみる大権力闘争が繰り広げられており、江沢民死亡説はそうした争闘の中から表層に滲み出たものだというのだ。ガセ情報を流した香港亜洲電視の副社長は、江沢民の出現後に引責辞任している。

江沢民が壇上に登場し、胡錦濤と笑顔で握手を交わす姿の裏には、それぞれの思いが交差し見えない火花が散っていたようにも見えた。

中央党学校訪問団の企業幹部、省庁課長等を前にして、李源潮組織部長が何一つ語れなかった理由も、北京中央がこうした権力闘争の最中にあることを窺わせる。うっかり失言すれば、たちどころに失脚する。その恐怖から李源潮は公式発言を避けたと思われるのだ。

では中国共産党内部では、具体的にどのような権力闘争が繰り広げられているのか

人間関係は複雑で、さまざまな人脈が交差しているのだが、簡単にいえば4つのグループによる綱引きと捉えていいだろう。その4つとは、

①共青团（共産党青年団）→一般に『団派』と呼ばれる。胡錦濤を中心とする一群

②上海幫→江沢民をトップに据える一群。賈慶林（常務委員）張徳江（副首相）等

③太子党→習近平、鄧樸方（鄧小平の子）等に代表される。上流階級子弟の一

④軍派→習近平の次を狙う軍人支援一派。上記①と対立しているのが②上海幫と③太子党の連合グループだった。

最近になって、この対立構図に割って入っているのが④の「軍派」である。

胡錦濤統治の10年間は2013年3月で終了する。

## 首相人事を巡って

団派すなわち胡錦濤をトップとする共青团は、李克強（56）を首相に推している。李克強は小沢一郎の家で暮らしたこともある政治家で、小沢一郎と強い結びつきがあることで知られる。

太子党の習近平が推すのは前北京市長で経済通の王岐山（63）。

10月24日からジュネーブで核開発を巡る米朝高官協議が行われるが、これを横目で睨みながら中国の李克強（副首相）が23日に平壤を訪れた。北朝鮮との話し合いとなれば張徳江（副首相・64）が表に出るのが普通だった。張徳江は金日成総合大学を

先日閉幕した6中全会では2012年末に党大会（中国共産党全国代表大会）が開催され、そこで人事が決定されることになった。とはいえ、中国の政権トップである国家主席の座に習近平が就くことは既に決定している。問題は習近平の下で誰が首相になるか、そして9人の常任委員の内訳はどうなるかだ。

最終決定は来年末に持ち越しとなったが、今回の6中全会である程度の結論は出たはずだ。常任委員9人の内訳は、5人+4人になるだろう。団派が5人を占めるか、太子党が5人を占めるか、そこが攻めぎあいである。さらには首相ポストをどちらが奪うかだ。

太子党または上海幫が首相に就けば習近平は盤石の体制を敷くことができる。団派が獲れば胡錦濤の影響力は残り続けることになるだろう。

卒業した江沢民派の大物。最近江沢民派から胡錦濤に鞍替えしたとの噂も流れていたが、団派としては何としても李克強を表舞台に登場させ、次期首相のポストに就かせたいようで、今回の訪朝にもその意図が見てとれる。

李克強、王岐山という対立構図に割って入り、首相の座を狙っているのが薄熙来（62）。薄熙来の父、薄一波は副首相を務めたこともある山西省の実力者。薄熙来自身は「風見鶏」と陰口を叩かれることもあるが、時局を読み取る能力に長けている。文革（文化大革命）の際には大衆の面前で父

親を殴り、話題を呼んだこともあった。現在は重慶市の書記で、どちらかというが目立たないポストに就いているが、毛沢東の文革を絶賛し、重慶大学に毛沢東像を建立するなど、「新左翼」の旗手として毛沢東原理主義者だけではなく、保守系の幅広い支持を得ている。

薄熙来の新左翼に対抗するのが胡德平(69)。胡德平は鄧小平の右腕として活躍した胡耀邦の子で、8月末に行われた「文革否定歴史決議30周年」でも新左翼を真っ向から否定。新左翼との理論闘争も激しい。

この他、共青団の汪洋(広東省書記56)、江沢民系の劉雲山(党宣伝部長64)、同じく江沢民系の孟建柱(公安相64)、さらには太子党の実力者で鄧小平の息子、鄧撲方(67)などが次期指導部入りの可能性を囁かれている面々だ。

話をさらに複雑にさせているのが、習近平の次を狙っている軍派である。

軍を後ろ盾としているから、軍事力は間違いなく所有しているが、同時に例えば河

北省などは宇宙ロケット打ち上げ基地もあり、最先端科学技術を保有するという強みも持っている。河北省の省長、張慶偉、福建省の省長の蘇樹林等がこの一群と見なされている。

軍派の狙いは習近平の次、つまり11年後を睨んでのものだが、従前の2大グループ対立構図を塗り替えるキャスティングボードとなることを視野に入れている。

同様に次の次を狙っている若手の一群もいる。内モンゴル書記の胡春華(48)、湖南省書記の周強(51)だ。この二人は共青団第一書記を務めたこともある実力者。胡錦濤は共青団第一書記から国家主席になった経歴を持ち、二人がそのコースを歩む可能性は高い。とくに胡春華は内モンゴル自治区で騒乱が発生した際、直ちにこれを抑え込んだ実力が中央から評価されている。

あと1年余となった胡錦濤政権は、早くもレームダック化しようとしており、こうした勢力が凌ぎを削って次期指導部入りを狙っているのだ。

## 不動産バブル崩壊

興味深いのは江沢民時代の首相、朱鎔基による温家宝首相攻撃だ。これは即ち、上海幫による団派攻撃と捉えられる。

朱鎔基の言い分は、こうだ。——胡錦濤、温家宝政権が誕生する際に、政権指導部は「政治改革」を掲げた。経済体制が「社会主義市場経済」に代わった以上、政治体制にも変革が必要だと主張した。ところが胡錦濤、温家宝の9年間で何か変化があっただろうか。

これに対して温家宝はこう反論する。

江沢民時代に朱鎔基(当時首相)が提唱した税制改革が諸悪の根源だ。土地開発、土地売買の税はすべて地方税となり、国家は何の恩恵も浴することがなかった。大規模土地開発は最初、張徳江が書記を務める浙江省に始まり、やがて浙江省書記は習近平になった。この税制改革により、地方は潤い、地方の役人もまた懐を潤したが、国家は潤っていない——と。

温家宝といえば5月に来日した折り東日本大震災の被災地を訪問。福島では笑顔で

トマトを頬張り、日本国民の間では好印象を持たれているが、中国ではまったく人気がない。

温家宝夫人の張培莉は中国最大の宝石会社、北京戴蒙得（ダイヤモンド）宝石の会長であり、中国宝石協会副主席。温家宝が首相に就任する際に事業から身を引くとしていたが、結局はそのまま事業を継続、形式的には温首相と離婚したと伝えられる。また長男の温雲松も中国有数の金融、IT関連の社長で、未公開株ファンド情報に直ちに900億円を調達したとの噂が流れた人物。夫人、長男の荒稼ぎぶりが嫌われ、温家宝の評判も芳しくない。

温家宝の不人気ぶりを突いて、朱鎔基が団派全体を責めているのだ。

その背後には、バブル下にあった中国経済の破綻が目前に迫っていることがある。

インフレ引き締めのため、金融当局は今年3度にわたり政策金利を引き上げ、また預金準備率も半年に6度という異常な頻度で引き上げた。だがインフレは収まらず、逆にこれが中小企業の倒産ラッシュ状態を生んでしまった。中国の国民総生産の6割以上を占める中小企業が潰れることは、中国経済の先行きがかなり危険なものであることを意味する。

こうした状況を受け、とくに不動産がバブル崩壊へと進みつつある。

## 激動の世界

ユーロ圏17カ国はブリュッセルで10月21日に財務相会議を行い、ギリシア財政危機に対する第6次支援を決定した。ギリシアのデフォルト（債務不履行）を何とか避

現時点での問題は、不動産バブル崩壊が、無事軟着陸できるか、ハードクラッシュするかなのだ。軟着陸にもいろいろある。非常に静かに滑らかに降り立つことは、もはや無理だろう。

斜めに傾きながら片輪で着地するかもしれないし、乗員が怪我を負うような乱暴な着陸になるかもしれない。多少の被害が出て、軟着陸ができれば、後は何とかなる。だがハードクラッシュというようなことになったら、どうなるか。

現在の中国事情を観測する限り、ハードクラッシュの可能性は低いようにも思える。しかし経済は魔物であり、一寸先は闇だ。中国通のなかには「年内にハードクラッシュするか、時間をかけてゆっくりソフトランディングするかは五分五分」と分析する者もいる。

もしハードクラッシュすれば、単に中国経済が崩壊するでは済まない。それは即ち中国共産党が終焉することを意味する。

次期政権を担う習近平にしてみれば、不動産バブルの決着を早く片付け、新たなスタートを切りたい。経済混乱を長引かせたくないというのが本音だ。

中国国内のこうした不安定状況を、対岸の火事とばかり、高みの見物を決め込むわけにはいかない。

けようと、EU（欧州連合）だけでなくIMF（国際通貨基金）も躍起になっている。しかし救済措置と引き換えに苛酷な財政緊縮政策を押し付けられるギリシアでは、国

民大衆の不満が募り、場合によってはギリシアが自らデフォルトする可能性もある。

前F R B（米連邦制度理事会）議長のグリーンズパンは10月8日に、「ギリシアはデフォルトするだろう。その結果欧州にリーマン型の金融危機が起き、米国に飛び火するかもしれない」と語ったが、ギリシアがデフォルトしたらリーマンブラザーズ・ショックより酷いことになるはずだ。デフォルトの嵐はギリシアからスペイン、ポルトガル、イタリアに飛び移り、フランスどころか南米全域が、そして米国もまたその嵐に巻き込まれるはずだ。そうなれば東京市場などひとたまりもない。人類が初めて体験する史上最悪の金融危機が勃発するだろう。

だからこそ、ユーロ圏、EU、IMFは必死でギリシア危機を救おうとしている。

ギリシアは今、僅かな振動、僅かな風一つで倒れるほど危険な状況にある。

そんな状況下、中国の不動産バブルが弾け、それがハードクラッシュという最悪の事態を迎えたらどうなるか。

中国から一気に欧州に飛び火し、それは直ちに南北米大陸を襲う。その激震で日本は吹き飛ばされ、地球を一周して再度中国に襲いかかり、中国経済を根底から破壊する。

中国が迎えているバブル崩壊を、中国政府指導部がどのように対処するか。無事に軟着陸できるかハードクラッシュするか。じつは世界の未来はそこに懸かっていると、言っても過言ではないのだ。

派閥抗争と思想的対立、責任のなすり合い……。そうした中国の権力闘争の陰に、世界の近未来が透けて見えるようだ。■